

く る め じ ょ う か ま ち い せ き

久留米城下町遺跡

— 第 27 次 発 掘 調 査 報 告 —

平成 31(2019)年 3 月
久留米市教育委員会

序

久留米市は、筑紫平野の中央に位置し、水路と陸路の要所であることから、古くから筑後地域の政治・経済・文化・宗教の中心地として発展をとげてきました。

今回の調査は、久留米市中心部の通町で実施しました。通町は久留米城下を東西に貫く都市軸であり、近世から現代まで久留米の経済の中心としての役割を果たしました。

調査では江戸時代の生活用品に加え、大量の製鉄遺物が発見され、久留米城下における鉄生産を解明する貴重な資料が得られました。

今回の成果を活かして、久留米市の市民文化や教育の発展に貢献できれば幸いです。また、発掘調査に際して多大なご協力をいただきました九電不動産株式会社様ならびに周辺住民の皆様にご心より御礼申し上げます。

平成31年3月31日

久留米市教育委員会
教育長 大津 秀明

例言

1. 本書は、共同住宅建設に先立ち、平成29年度に九電不動産株式会社の委託を受けて実施した、久留米城下町遺跡第27次調査の発掘調査報告書である。
2. 調査は久留米市教育委員会が調査主体となり、市民文化部文化財保護課の江頭俊介が担当した。
3. 本書に掲載した遺構実測図の作成は、江頭と大淵文子、中村麻衣が行い、浄書は「遺構くん cubic」で作成した。遺物の実測は丸山裕見子と宮崎彩香が行い、浄書は江頭と今村が行った。
4. 遺構写真は、マミヤRB67を用いて江頭が撮影した。遺物写真撮影はニコンデジタルカメラD700を用いて、久留米市埋蔵文化財センターにおいて、江頭が行った。なお、本文中の遺物番号と写真図版の遺物番号は同一である。
5. 遺構実測図は国土調査法第Ⅱ座標系(世界測地系)を基に作成し、図面の方位は全て座標北を示す。なお、熊本地震に係るパラメータ補正は行っていない。
6. 本書に使用した遺構の略記号は、SD-溝、SE-井戸、SK-土坑、SX-炉等を示す。
7. 出土遺物・記録類は、全て久留米市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・保管されている。
8. 本調査の略記号はLKM-027、調査番号は201711である。
9. 本書の執筆・編集は江頭が行った。
10. 表紙写真はSK21出土碗形滓と羽口である。

本文目次

I. はじめに	1
II. 位置と環境	2
III. 調査の記録	4
IV. 総括	24

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

本調査は、共同住宅建設に伴う事前の発掘調査である。平成29年6月13日、九電不動産株式会社より、久留米市通町107-4、107-5、107-6、日吉町29-6、29-7、29-8、63-2における「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出された。当該地一帯は、かつての通町六丁目の範囲内にあたり、今回の調査地においても、江戸時代以前の遺構が残存している可能性があると考えられたため、発掘調査が必要である旨回答した。同年6月19日九電不動産株式会社より発掘調査の依頼が提出され、それを受けて久留米市と九電不動産株式会社は、7月14日埋蔵文化財発掘調査にかかる委託契約を締結し、久留米市教育委員会は8月1日から発掘調査を開始した。平成29年11月8日に発掘調査を終了し、その後、平成31年3月31日まで整理作業と報告書の作成を行った。調査面積は280㎡である。

2. 調査の体制

調査委託者：九電不動産株式会社

調査主体：久留米市教育委員会

(平成29年度)

調査担当：市民文化部文化財保護課

部長：野田秀樹

次長：西村信二

課長補佐：山崎万里子

事務主査：塚本映子 豊福早苗

整理担当：宮崎彩香

文化芸術担当部長：甲斐田忠之

課長：馬場博文

主査：水原道範

調査担当：江頭俊介

(平成30年度)

整理担当：市民文化部文化財保護課

部長：松野誠彦

次長：西村信二

課長補佐：久保田由美

事務主査：塚本映子

整理担当：江頭俊介 宮崎彩香

文化芸術担当部長：宮原義治

課長：水島秀雄

主査：水原道範

発掘調査臨時職員

秋永絹子、牛島康典、大淵文子、川原初美、川原光貴、高尾春代、田中樹子、田中とし子、中村麻衣、松尾朱美、丸山幸、東南、藤木幸子、二村智治、由布幸子、渡辺しげ子、渡辺やつ子

整理臨時職員

梶島かおり

3. 調査の目的と経過

調査地は近世久留米城下の東西の基軸となる通町に立地しており、近世以前の土地利用の状況を確認することを目的として調査を行った。平成29年8月1日、表土剥ぎを開始した。調査区東側では地表下0.2mで屋敷境となる石垣を検出したため、一旦表土剥ぎを中止し、石垣の調査を行った。西側は地表下0.6mの黄褐色の地山上面まで掘り下げ、遺構を検出した。東側の石垣の裏込めから近代の煉瓦やガラス片などが出土したことから、石垣が近代に帰属することを確認し、8月22日に高所作業車による全景写真撮影を行い、翌日から東側を地表下0.6mまで掘り下げた。近世の遺構面全体の調査を続け、10月31日から埋め戻しを行った。翌11月1日に埋め戻しを完了し、調査を終了した。遺構実測はトータル・ステーションで行い、「遺構くんcubic」で編集した。記録写真は、カラーリバーサル、モノクロともに、6×7判で撮影した。

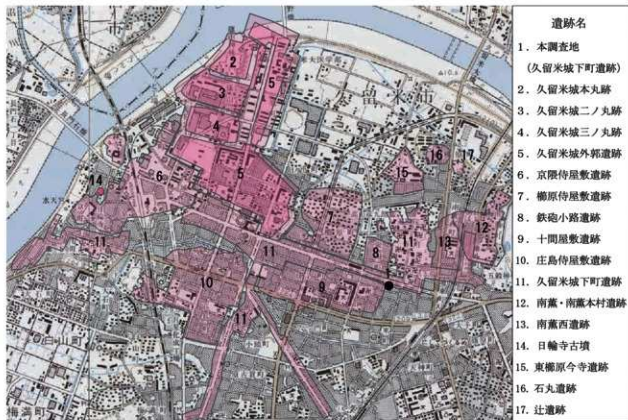
II. 位置と環境

福岡県久留米市は、九州の北部、筑後川の中流域にあたり、筑紫平野の中央に位置する。九州一の大河筑後川は、熊本県阿蘇郡瀬の本高原に端を発し、山岳部を北流したのち、玖珠川を合わせ、うきは市荒瀬から西は平野部を西流する。平野部では佐田川、小石原川、大刀洗川、巨瀬川、宝満川などの支流を合わせ、久留米市北西部で南に方向を変え有明海に注ぐ。熊本県、大分県、福岡県、佐賀県の四県にまたがる流域面積は2,860平方キロメートルを有する。川幅は広く、完全に護岸が施された現代においても、中流域で100m、下流域で120m以上を測る。流域の年間降水量2,000mmと、全国平均より多く、水量は豊富である。利根川、吉野川とならぶ日本屈指の暴れ川であり「筑紫次郎」の異名をとる。筑後川の堆積作用によって形成された筑紫平野は、有明海の最奥部に位置する九州最大の平野であり、北西を脊振山地、北東を古処山系、南東を耳納山地に囲まれ、西方と南東方に開けている。筑紫平野の中央は脊振山地から派生する丘陵と耳納山地から派生する段丘が東西両側から突出しており、筑後川を挟んで地峡部を成している。この地峡の北西側の丘陵上には肥前一宮である千栗八幡宮が鎮座し、南東側の段丘頂部には久留米城が位置する。

「久留米」または「久留目」の文献における初出は、『隈文書』『報恩寺々領坪付之事』応永25年(1418)2月28日付である。ここに「くるめ屋敷」、「久留米屋敷」、「久留目屋敷」の記述がある。続いて、『鷹尾神社関係文書』応永27年(1420)7月「溝口目安申状案」に「久留目方」の記述がある。いずれも「久留米」は高良山関係者を指すと考えられている。「久留米城」は『九州治乱記』(1720)において、天文2年(1533)正月大友氏と大内氏の合戦が筑後地方に波及し、大内方の武将陶興房が久留米・安武の両城を落とした際のこととして、久留米城主豊饒美作入道永源が肥前東津村に退いたことが記され、大永年間(1521～1527)には、高橋某が「笹山城」(久留米城のこととみられる)に磐壘を築いたと伝えられている。次に『筑後将士軍談』では、天正13年(1585)龍造寺氏と大友氏が筑後地方で争い、久留米城に籠る高良山座主麟圭が龍造寺勢を筑後川左岸に引き入れたとされる。天正13年(1585)9月には筑紫氏が大友方の武将高橋紹運の本城、宝満城を攻撃したこ

とにより、高良山に在陣していた高橋勢が筑後から撤退する。これにより龍造寺方の軍勢が高良山を占領した。その際久留米城は龍造寺方の内田紀伊守信堅と姉川中務大輔信安が城番を務めたことが記されている。

その後秀吉による九州出兵を経て、久留米3万5千石（諸説あり）が毛利元就の九男小早川秀包に与えられた。秀包領であった関ヶ原合戦までの14年間の久留米城下の姿は未だ詳らかでないが、両替町遺跡（久留米城下町遺跡第2次）の調査でロザリオや教会堂の遺構などが検出されていることや、久留米城下が当時のキリスト教の布教拠点として機能していたことなどから、すでに相当規模の街区が形成されていたことが窺える。関ヶ原合戦後には、久留米城は柳川城主田中吉政の支城となり吉政の四男則政が配置されたが、この頃も二ノ丸の拡張や、筑後川梅林寺岸の開削など大規模な都市整備事業が行われた。本調査地が位置する通町（当時の呼称は長町）はこの頃すでに4丁目までが存在し、通町と交差する三本松町や、川港である洗切、ほかに内町、元町などが形成されていた。田中家の改易に伴い元和7年（1621）に有馬豊氏が北筑後21万石の領主として久留米に封ぜられ、引き続き外郭の造成や町の延伸拡張を行った。通町は寛永4年（1627）から東へ拡大し、寛永19年（1642）には九丁目まで延伸した。本調査地は元禄図、延宝図、明治5年通町絵図では六丁目にあたり、天保図でのみ五丁目にあたる。調査区外の敷地南側は、天保図以降は有馬主膳中屋敷の北東隅にあたる。現在も屋敷地と町屋の境に石垣造りの水路が流れており、往時の面影を残している。



第1図 周辺の遺跡分布図 (1/25,000)



第2図 調査区位置図 (1/2,500)

Ⅲ. 調査の記録

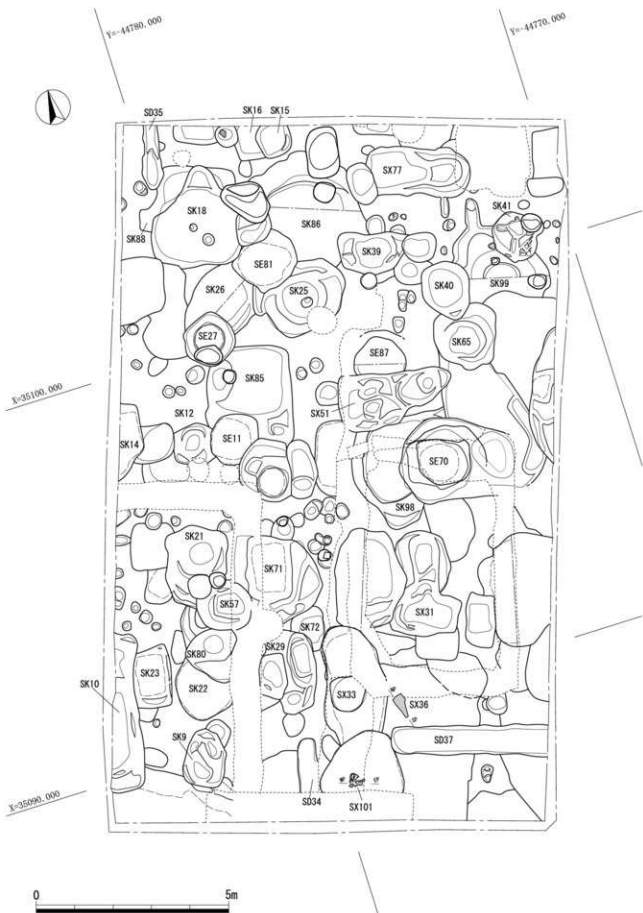
1. 検出遺構

近世の溝3条、井戸7基、土坑37基、埋甕3基、炉3基、ピット、その他石組み等が検出された。紙面の都合上、各遺構の規模や諸特徴については主要遺構一覧表を参照願う。

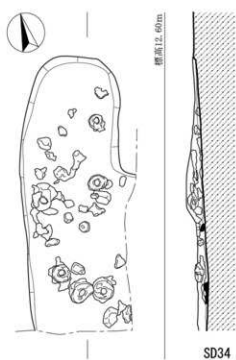
特記すべき遺構について述べる。SX31は埋土上部に赤褐色の焼土が大量に堆積し、下部には同じく大量の炭が堆積している。平面は逆T字を呈し、細長い奥部分が一段高く燃焼部となり石が敷き詰められている。手前は一段低くなり、足場と考えられる。足場の底面には溶鉄が付着している。遺物は19世紀の陶磁器が出土している。SX51は不正楕円形の平面形を呈する。東側が一段高く、炭の層を有する。西側は低く、足を置いたと思われる窪みが2箇所ある。19世紀の遺物が出土している。SX77は、東側は平面円形を呈し、西側は長方形を呈する。東側には壁面に粘土が貼り付けられ、竈に類似する。西側は中位と下位の二層にタキを有し、固く締められている。18世紀の遺物が出土している。SD37は底部に長い筒状の空洞を6本有し、その間を固定するために礫が並べられている。SD37の延長上の西側には環状に小礫が密集しており、その下には溶鉄がある。時期別の遺構数は、19世紀の遺構が多く、18世紀のものがこれに次ぎ、17世紀のものは少ない。

2. 出土遺物

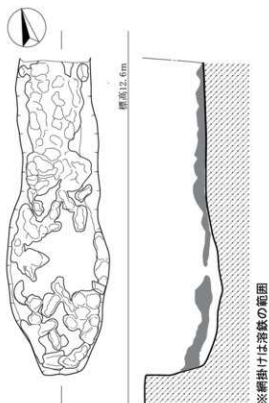
バンコンテナー70箱分の遺物が出土した。鉄滓、鉄製品等が50箱と主体を占め、近世陶磁器は20箱である。詳細は遺物観察表を参照されたい。以下、特記すべき遺物について述べる。



第3図 調査区遺構配置図 (1/100)

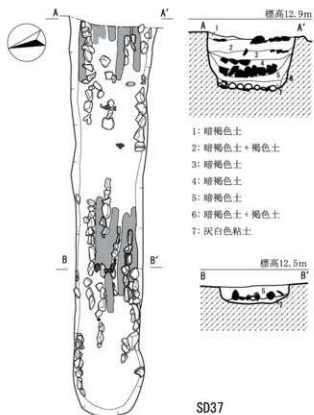


SD34



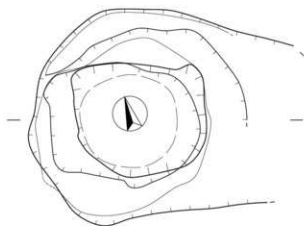
※網掛けは溶鉄の範囲

SD35

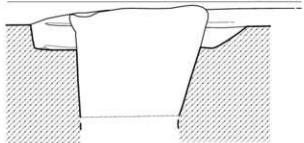


SD37

- 1: 暗褐色土
- 2: 暗褐色土+褐色土
- 3: 暗褐色土
- 4: 暗褐色土
- 5: 暗褐色土
- 6: 暗褐色土+褐色土
- 7: 灰白色粘土



標高12.4m



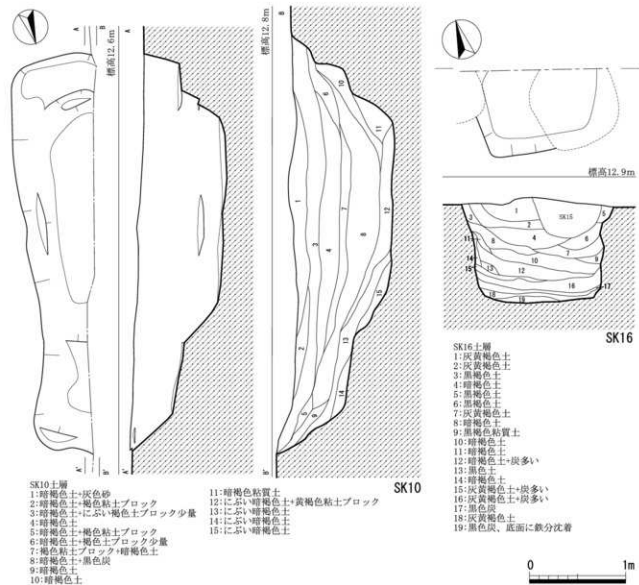
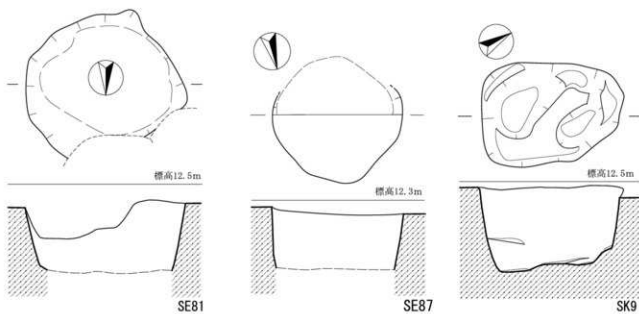
SE70



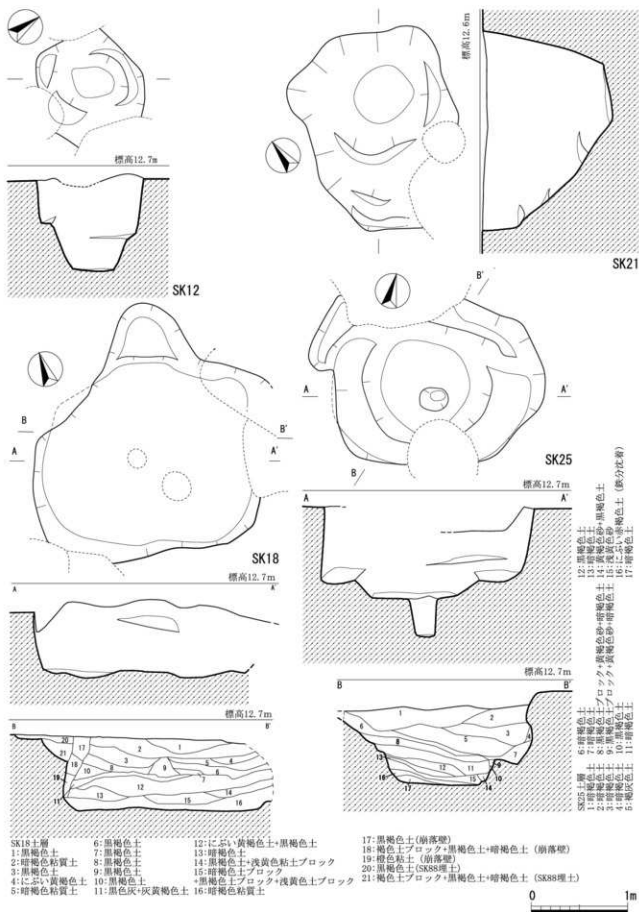
※濃い網掛けは鉄滓

薄い網掛けは粘土床の範囲

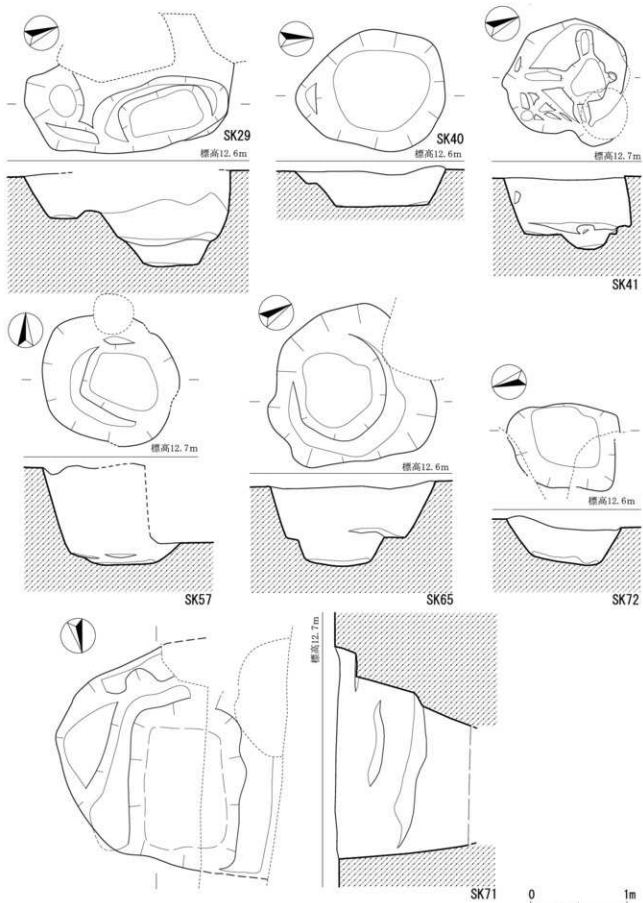
第4図 SD34、SD35、SD37、SE70遺構実測図(1/20、1/40)



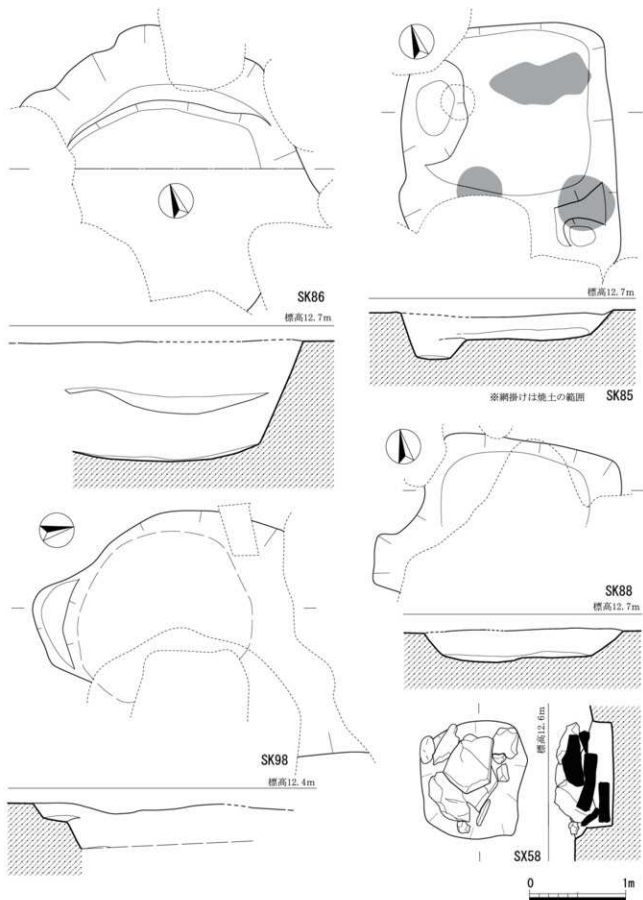
第5図 SE81、SE87、SK9、SK10、SK16遺構実測図 (1/40)



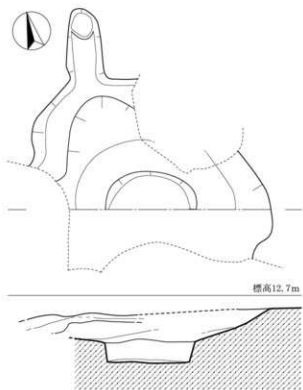
第6図 SK12、SK18、SK21、SK25遺構実測図(1/40)



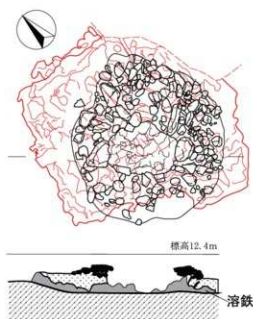
第7図 SK29、SK40、SK41、SK57、SK65、SK71、SK72遺構実測図 (1/40)



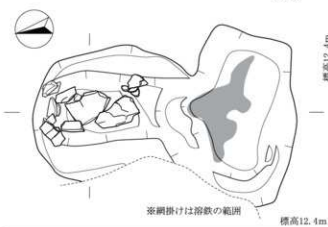
第8図 SK85、SK86、SK88、SK98、SX58遺構実測図 (1/40)



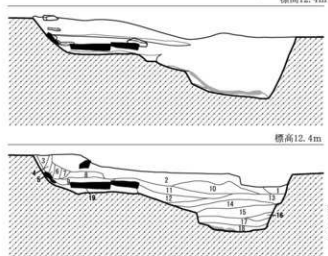
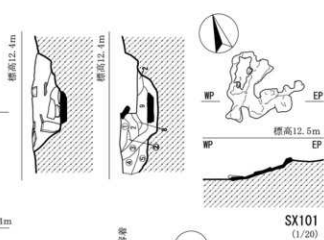
SK99



SX33
(1/20)

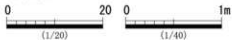


SX31

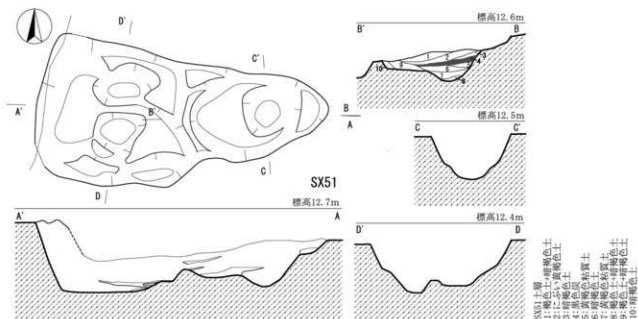


SX36
(1/20)

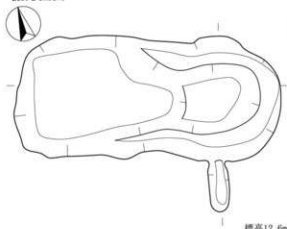
- 8: 灰褐色土
9: 黒色土
10: 黒色土
11: 黒色土
12: 黒色土
13: 黒色土
14: 黒色土
15: 黒色土
16: 黒色土
17: 黒色土
18: 2.5% 炭色砂 底面鉄屑
19: 明赤褐色土
- SX31土層
①: 褐色土
②: 褐色土
③: 褐色土
④: 褐色土
⑤: 褐色土
⑥: 褐色土
⑦: 褐色土
⑧: 褐色土
⑨: 褐色土
⑩: 褐色土
⑪: 褐色土
⑫: 褐色土
⑬: 褐色土
⑭: 褐色土
⑮: 褐色土
⑯: 褐色土
⑰: 褐色土
⑱: 褐色土
⑲: 褐色土
⑳: 褐色土
㉑: 褐色土
㉒: 褐色土
㉓: 褐色土
㉔: 褐色土
㉕: 褐色土
㉖: 褐色土
㉗: 褐色土
㉘: 褐色土
㉙: 褐色土
㉚: 褐色土
㉛: 褐色土
㉜: 褐色土
㉝: 褐色土
㉞: 褐色土
㉟: 褐色土
㊱: 褐色土
㊲: 褐色土
㊳: 褐色土
㊴: 褐色土
㊵: 褐色土
㊶: 褐色土
㊷: 褐色土
㊸: 褐色土
㊹: 褐色土
㊺: 褐色土
㊻: 褐色土
㊼: 褐色土
㊽: 褐色土
㊾: 褐色土
㊿: 褐色土



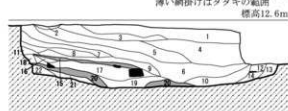
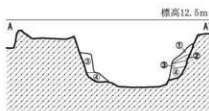
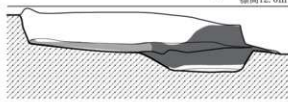
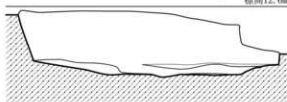
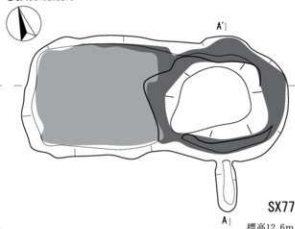
第9図 SK99、SX31、SX33、SX36、SX101遺構実測図 (1/20、1/40)



掘方図面



使用面図面



- SX77土層
- ①:暗褐色土
②:赤褐色土
③:黒色土
④:⑬と同層 明黄褐色土+暗褐色土
1:黒褐色土
2:褐色粘土
3:暗褐色土+褐色土ブロック
4:暗褐色土
5:暗褐色土+褐色土ブロック
- 6:暗褐色土
7:暗褐色土
8:暗褐色土
9:暗褐色土
10:暗褐色土
11:黒褐色土
12:明赤褐色土+暗褐色土
13:明赤褐色土+暗褐色土
14:明赤褐色土+暗褐色土
15:暗褐色土+黒色砂(タタキ)

- 16:暗褐色土+黒色砂
17:暗褐色粘質土
18:暗褐色土
19:暗褐色砂+明赤褐色土
20:暗褐色土+黒色砂+炭化物(タタキ?)
21:暗褐色粘質土
22:暗褐色土+黄褐色砂

※濃い網掛けは粘土貼付け範囲
薄い網掛けはタタキの範囲

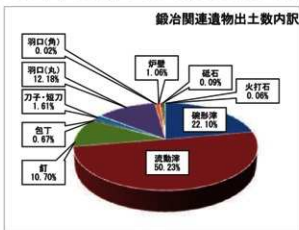


第10図 SX51、SX77遺構実測図(1/40)

第1表 主要遺構一覧表

残存部	種別記号	通称符号	遺構の性質	築方向	平面形	断面形	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	切り欠	備考	遺構の年代	特記遺物
第4区	S D	34	溝	-15	直線的	逆台形	1.4	0.5以上	3cm	S912に接される	高い	築末	破口
第4区	S D	35	溝	-16	直線的	逆台形	1.8	0.5	S918に接する S919に接する	高い	遺跡に明確が大要に付帯、南側面 部	18世紀中頃	鉄釘大量
第4区	S D	37	溝	遺跡部に 透交 +17	直線的	逆台形	4.0以上	0.7	0.23以上、S919に接する S920に接する	上から掘り込み、竹筒遺跡、石片、 漆黒磁器片		18世紀前半	
第3区	S E	11	井戸	-	円形	溝	1.4	1.4	0.9以上	S980Cに接する S980Dに接する	1m以下未満、裏掘り、掘方なし	19世紀前半	
第3区	S E	24	井戸(覆瓦)	-	円形	溝	0.7	0.7	0.5以上	S929に接する	裏掘り	19世紀前半	磁片
第3区	S E	27	井戸	-	円形	溝	1.3	1.0以上		S980Cに接する S928に接する	漆黒磁	築末以降	
第4区	S E	30	井戸	-	円形	溝	掘方2.7 以上 掘方1.3 未満	1.3以上		S980B9に接する	掘土裏掘、裏掘り、1.5以下未満	18世紀後半	
第5区	S E	61	井戸	-	円形	溝	1.8	1.8	0.9以上	S918、S920に接される S920A9に接する	裏掘り、木炭、掘方なし	17世紀後半	
第5区	S E	67	井戸	-	円形	溝	1.4以上	1.3	0.9以上	S912に接される	裏掘り、掘方なし、木炭	19世紀中頃	
第5区	S K	9	土坑	-	隅丸方形	逆台形	1.5	1	0.9	S946に接する		19世紀前半	
第5区	S X	10	土坑	-	方形	逆台形	4	0.7	0.9	S923に接する		18世紀中頃	鉄釘大量出土
第6区	S K	12	土坑	-	円形	逆台形	1.0	1.0	0.9	S911Cに接される		19世紀前半	
第3区	S K	14	土坑	-	方形	逆台形	1.9	0.8以上	0.6以上	S946に接する	0.3m以下未満	18世紀中頃	
第3区	S K	15	土坑	-	隅丸方形	逆台形	0.8	0.8	0.4	S918に接する	中心より上から掘り込み	築末	長多い
第5区	S K	16	土坑	-	方形	溝	1.5	0.8	0.8	S946Cに接される S912Cに接される	掘土に漆黒、裏多し	18世紀後半	漆黒多い
第6区	S X	18	土坑	-	方形	溝状	2.6	2.3	0.4	S946に接する	遺物多い、掘土に漆黒、裏多し	築末	漆黒
第6区	S K	21	土坑	-	隅丸方形	逆台形	2.1	1.6	1.2	S945、S946に接する S912Cに接される	高い、掘土多い	19世紀前半	漆黒
第3区	S K	22	土坑	-	楕円形	平形	1.6	1.3	0.18以上	S980Cに接される	0.18m以下未満	19世紀前半	
第3区	S K	23	土坑	-	方形	逆台形	1.6	0.9	1.3以上	S912Cに接される	1.3m以下未満、高い	18世紀後半	
第6区	S X	25	土坑	-	楕円形	溝状	2.1	1.7	1.3	S912Cに接される S928、S980Cに接される		18世紀後半	漆黒
第3区	S K	28	土坑	-	楕円形	逆台形	2	1.6	1	S925、S929、S927Cに接される	上面に掘土と灰黒層	築末	漆黒
第7区	S K	29	土坑	-	隅丸方形	逆台形	2.1	0.7	1	S980Cに接される S927に接する	遺物の漆黒層は伊達か?	築末	漆黒層大量出土
第3区	S K	36	土坑	-	楕円形	逆台形	1.7	1	0.9	S980Cに接される S929に接する	掘土中に20cm以上の遺物あり、裏掘り	18世紀前半	
第7区	S X	40	土坑	-	円形	逆台形	1.5	1.2	0.4	S945、S929に接する		18世紀後半	破口
第7区	S X	41	土坑	-	円形	溝状	1.3	1.3	0.4	S946に接する S945Cに接される	遺物特多し	17世紀前半	
第3区	S K	43	土坑	-	楕円形	逆台形	1.5	0.7	0.7	S980Cに接される	遺物多い	19世紀前半	
第7区	S K	57	土坑	-	円形	逆台形	1.4	1.2	1	S921、S945、S949に接する S941Cに接される	高い	18世紀中頃	
第7区	S K	65	土坑	-	円形	逆台形	1.7	1.6	0.9	S946に接する S946Cに接する		18世紀前半	
第7区	S K	71	土坑	-	楕円形	逆台形	2.4以上	2.1	1.4	S927に接する S921、S947に接する	1.4以下未満、内掘りなし	18世紀後半	
第7区	S K	72	土坑	-	隅丸方形	逆台形	1.1	0.9	0.9	S929、S971Cに接される		19世紀	漆黒層片多い
第3区	S K	80	土坑	-	楕円形	逆台形	1.3	1.4	0.1	S912Cに接される S929、S949に接する		築末以降	
第8区	S K	85	土坑	-	隅丸方形	逆台形	2.4以上	2.2	0.2	S921、S929、S929、S927、 S980Cに接される	高い	18世紀前半	
第8区	S X	86	土坑	-	円形	溝状	2.8以上	2.8以上	1.2以上	S911、S929、S929、 S929、S946、S946Cに接される	褐色掘土	17世紀前半	漆黒磁
第8区	S K	88	土坑	-	隅丸方形	逆台形	2.3以上	1.8以上	0.3	S911、S918、S935Cに接される	褐色掘土、高い	17世紀前半	
第8区	S K	96	土坑	-	不要円形	逆台形	2.6以上	1.7以上	0.5以上	S970、S980Cに接される	褐色掘土	17世紀後半	
第9区	S K	99	土坑	-	楕円形	逆台形	2.4以上	1.6以上	0.5以上	S945、S947、S980Cに接される		17世紀前半	
第9区	S X	31	伊	-	不整形	逆台形	2.7	1.5	0.8	S946Cに接される	掘土多褐色	築末	
第9区	S X	33	石堀み	-	溝状	-	0.9	0.9	0.1	S973D上面に露る	石堀みの下に砂付遺物	18世紀後半	
第9区	S X	36	床石	-	-	-	0.8	0.5	-	土堀の上面に露る	片割、掘方不明	不明	
第10区	S X	51	伊	8.6	不整形	逆台形	3	1.5	0.9	S927、S946、S946に接する	遺跡に漆黒層、裏多し	19世紀前半	破口
第8区	S X	58	石堀み	-	楕円形	十字溝状	0.7	0.5	0.3	S927に接する	掘りかき取りあり	19世紀	
第10区	S X	77	伊	16	隅丸方形	逆台形	2.7	1.2	0.4	S980Cに接される	内掘りに少々あり	18世紀前半	破口
第9区	S X	101	溝敷	-	不整形	-	0.4	3.5	-	土堀の上面に露る		不明	

鍛冶関連の資料が大半を占めるため、種別ごとに述べる。陶磁器は17世紀から19世紀の各時期のものが出土している。土製品はSK80出土の恵比寿土面が注目される。きめ細かい胎土で、表面は丁寧にナデが施され、裏面はエビオサエが残る。富山市千石遺跡出土品に類似する。次に鍛冶関連遺物について述べる。鉄製品は、釘、包丁、短刀、環状鉄製品の順に多く、鎌、十能、鉄、鑿、楔、鋸、斧などがそれに次ぐ。そのうち、商品となるか、又は原料として再使用される可能性がある製品が釘、包丁、短刀、鎌、楔、鋸、鉄、斧であり、鍛冶道具とみられるものは十能、鑿である。鉄滓は碗形滓と流動滓が合計10,123点(457kg)出土した。以下に傾向を記す。実測図は紙面の都合上、一部しか報告できていない



総点数(個)

碗形滓	3,093
流動滓	7,030
計	10,123

総重量(g)

碗形滓	341,522
流動滓	115,882
計	457,404

1個当たりの平均重量(g)

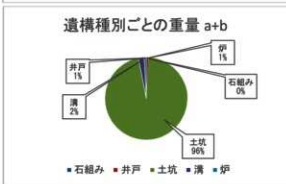
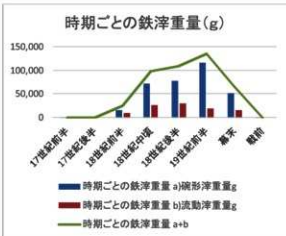
碗形滓	110
流動滓	16

時期ごとの鉄滓重量(g)

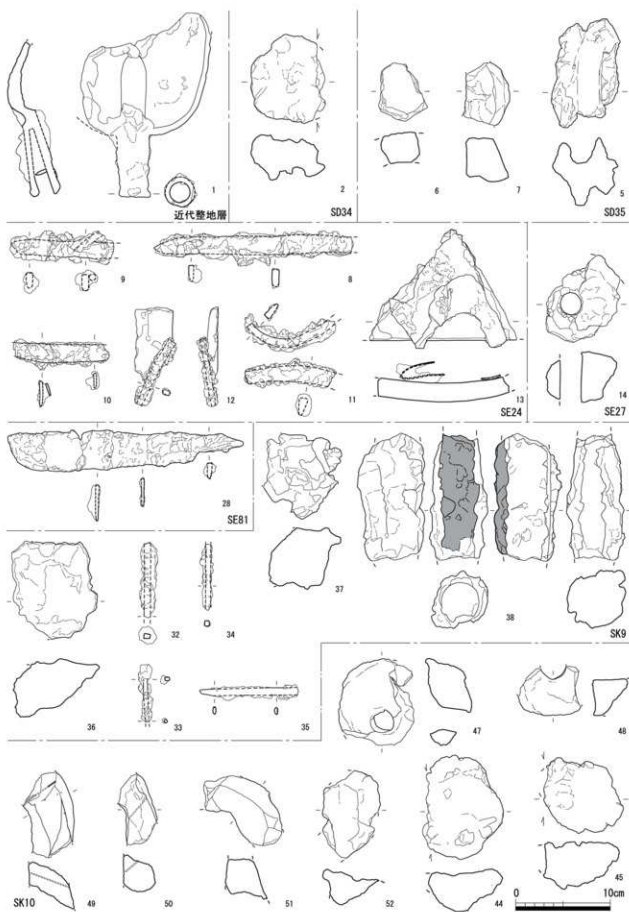
時期	a)碗形滓重量	b)流動滓重量	a+b
17世紀前半	292	50	342
17世紀後半	0	0	0
18世紀前半	15,610	9,826	25,436
18世紀中頃	71,975	26,283	98,258
18世紀後半	78,567	30,388	108,955
19世紀前半	116,796	19,814	136,610
幕末	51,517	15,017	66,534
戦前	160	0	160

遺構種別ごとの重量(g)

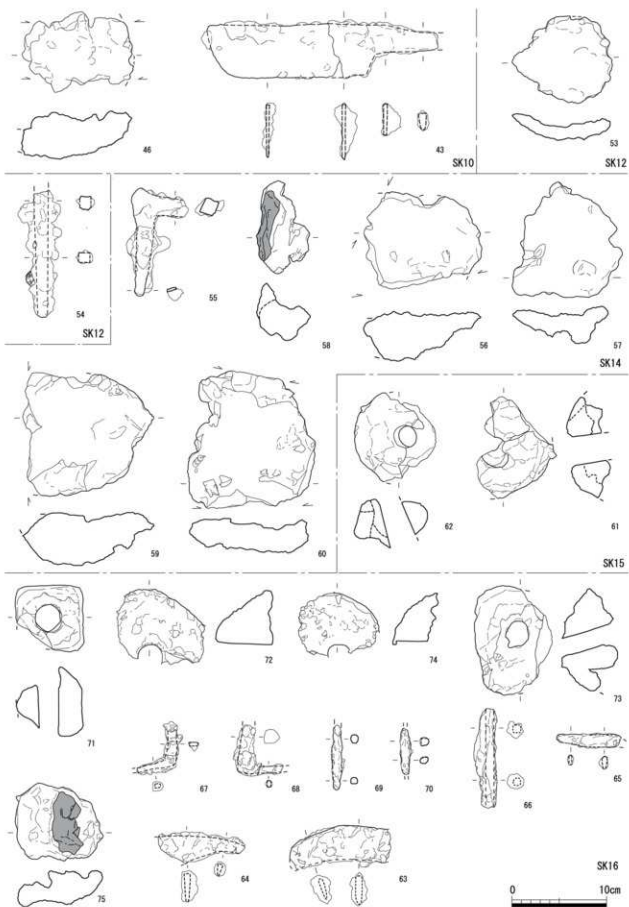
遺構種別	a+b
石組み	470
井戸	4,164
土坑	430,929
溝	10,284
炉	3,390



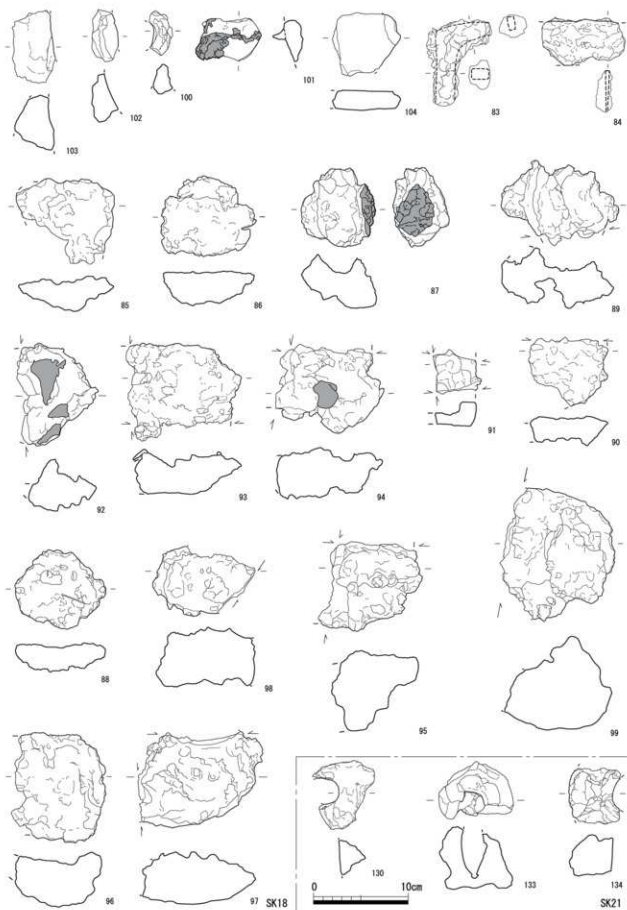
い。今回出土した碗形滓の特徴としては、800g程度の分量になるよう鋭利な刃物で切断した痕跡を有するものが多く、廃棄する際の便宜を図ったものとみられる。また、炭や小礫を多く含む。復元直径は30cm程度になるものが多い。流動滓は平均16gと小型のものが多い。羽口の大半は、焼が甘く長さ10cmで外形が円筒形を呈するが、4点のみ外形が断面方形を呈し、焼き締められたもの(71・161)が出土している。炉壁は焼きが甘く砂質で、針で開けたとみられる角柱状の穿孔がみられる。燃料は木炭、石炭、ボタ、珪化木、部材は石製と土製の方形のものが出土している。



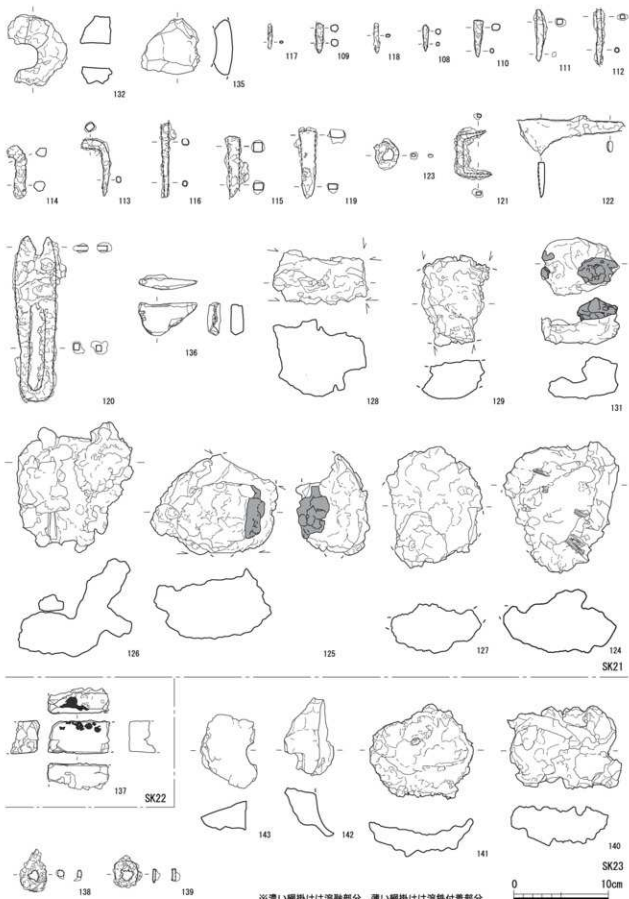
第11圖 出土遺物実測圖 (1/4)



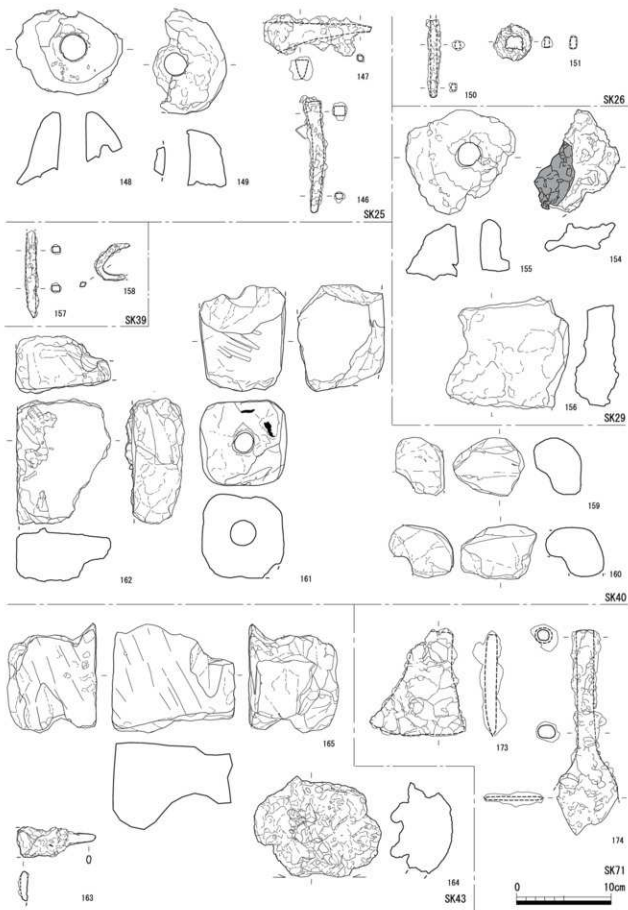
第12图 出土遺物実測図 (1/4)



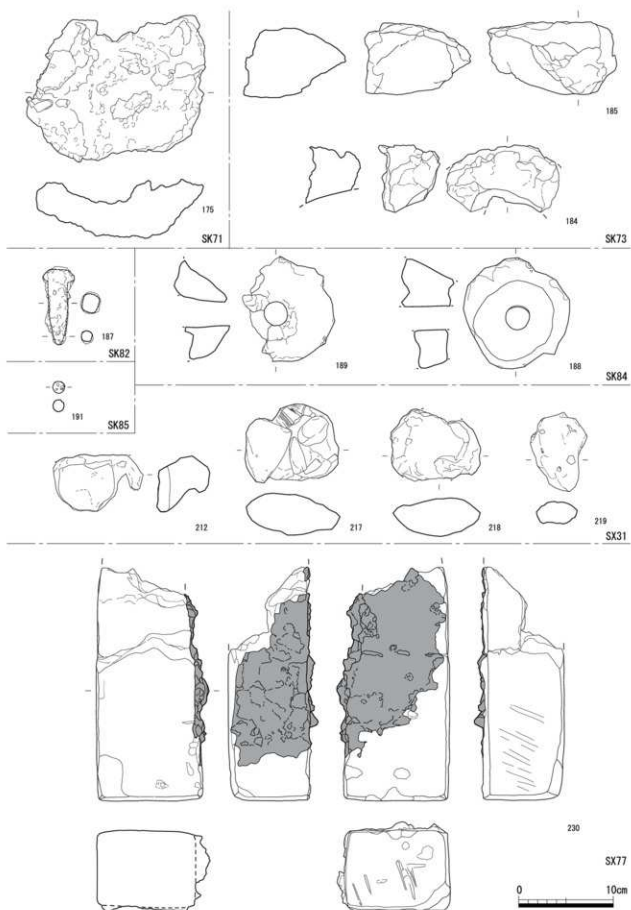
第13图 出土遗物实测图 (1/4)



第14図 出土遺物実測図 (1/4)



第15図 出土遺物実測図 (1/4)



第16図 出土遺物実測図 (1/4)



第17図 調査区全景 (東から)



第18図 SD34遺物出土状況 (北東から)



第19図 SD35遺物出土状況 (南から)



第20図 SD37検出状況 (西から)



第21図 SD37・S X33検出状況 (西から)



第22図 SE70掘方断面 (南から)



第23図 SE81掘削状況 (東から)



第24図 SK9土層断面 (西から)



第25図 SK10完掘状況 (北から)



第26図 SK18完掘状況 (西から)



第27図 SK21完掘状況 (南西から)



第28図 SK25完掘状況 (東から)



第29図 SK29埴壁出土状況 (北東から)



第30図 SK40羽口出土状況（北から）



第31図 SK41完掘状況（西から）



第32図 SK57完掘状況（南から）



第33図 SK65出土状況（北東から）



第34図 SK71掘削状況（南西から）



第35図 SK86土層断面（北から）



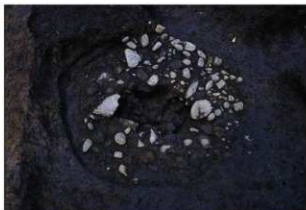
第36図 SK85完掘状況（西から）



第37図 SK88完掘状況（西から）



第38図 SK99土層断面 (北から)



第39図 SX33礫検出状況 (南から)



第40図 SX33溶鉄検出状況 (南西から)



第41図 SX31床面検出状況 (南西から)



第42図 SX31完掘状況 (南西から)



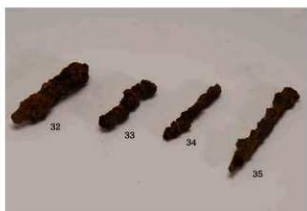
第43図 SX51完掘状況 (南西から)



第44図 SX77床面検出状況 (南東から)



第45図 SX77完掘状況 (北から)



第46図 出土遺物写真①



第47図 出土遺物写真②



第48图 出土遺物写真③



第49図 出土遺物写真④



第50図 出土遺物写真⑤

報告書抄録

ふりがな	くろめじょうかまちいせき だいにじゅうななじはくつちようさほうこく		
書名	久留米城下町遺跡 第27次発掘調査報告		
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書		
シリーズ番号	第407集		
編者名	江頭 俊介		
編集機関	久留米市 市民文化部 文化財保護課		
所在地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町15-3	Tel: 0942-30-9225 FAX: 0942-30-9714 Email: bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp	
発行年月日	2019（平成31）年3月31日		

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査の原因
		市町村	遺跡番号					
くろめじょうかまちいせき 久留米城下町遺跡 だいに ちようさ 第27次調査	ふくおかけん くろめし 福岡県久留米市通町 107-4、107-5、107- 6、日吉町29-6、29- 7、29-8、63-2	40203		33° 18' 55"	130° 31' 8"	20170801 ～ 20171110	280 m ²	記録保存調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
久留米城下町遺跡 第27次調査	集落	近世	井戸 土坑 埋焼 炉 石組 ピット		近世陶磁器、鍛冶関連遺物 等		約500kgに及ぶ鉄滓と鍛冶 炉等が検出された。	
土木工事の届出日		平成29年6月20日			遺物の発見通知日		平成29年11月15日 (29文財第1140号)	

要約

久留米市中心街を東西に貫く通町の田七丁目にあたる町屋の遺構を調査した。約500kgに及ぶ鉄滓と鍛冶炉等が検出され、近世城下における鉄生産の解明に資する貴重な資料が得られた。

久留米城下町遺跡

—第27次発掘調査報告—

久留米市文化財調査報告書 第407集

平成31年3月31日

発行 久留米市教育委員会
編集 久留米市
市民文化部 文化財保護課
印刷 香和印刷株式会社
久留米市津福本町2320-15